

開催報告

令和6年6月13日（金）13:30-15:00、研究大学コンソーシアム「学術情報流通の在り方に関する連絡会」の主催により学術情報流通に関する連続セミナー（第4回）「オープンアクセス時代にかわる研究評価の在り方:現状と未来」を開催しました。

講師に小泉周特任教授（自然科学研究機構）を招き、研究評価にあたり被引用数を活用する上での課題や限界、また、より適切な評価を行うため複数の指標を組み合わせる手法等について解説していただきました。また、大学の研究力をより正確に測るためには、研究成果の「量」や「質」のいずれかだけを見るのではなく、両者を組み合わせた「厚み」を見ることの重要性が指摘され、多様な指標を活用しても研究評価には依然として困難さが残る中、研究成果のオープンアクセス化が果たす役割についてもご講演いただきました。

質疑応答は佐藤初美部長（東北大学附属図書館）の司会で行われ、会場・オンラインから、研究評価の必要性、研究評価とOA促進の関係性、研究評価対象の多様化などについて、多くの質問が寄せられました。

また今回初の試みとなる会場でのアフターセッションには、対面参加者の大部分が参加し、活発な意見交換が行われました。

■参加者数 273名（対面 26名、オンライン 247名）

■アンケート結果 回答数：119

○職種 大学職員（図書系）：64 大学職員（研究推進系）：11 URA：22

大学教員・研究職：12 出版関係者：6 その他：4

○機関 国立大学：87 私立大学：22 公立大学：5 その他：5

○セミナーは参考になりましたか

とてもよかった：77 よかった：37

あまりよくなかった：4 よくなかった：1



○ご意見・ご感想 ※公開の同意をいただいたものです。

【講演内容について】

- ・人文社会科学系では、文献が主に日本語で発行されているということ以上に、紙媒体で発行していたり電子媒体であっても PDF のみでデータベースに情報が上がらないクローズドな環境での発行が中心となっています。このような発行形態を transferable なものに換えていくという政策を進めると、研究の実態はいまのままであっても、大学や研究分野の世界的評価が上がりやすくなるという可能性があると思っています。
- ・最適な評価指標が何であるか、これは答えの出ない問題であるが、研究者（特に若手）のやる気を引き出す、もしくはやる気を削がないものであってほしい。
- ・定量的な研究評価の難しさと課題について、実情も含め非常によく理解できました。
- ・OA と、引用などの評価との関連も聞けるとありがたかったです。
- ・オープンアクセスに特化した研究評価の在り方について、もう少しお聞きしたい。
- ・最後の、研究成果をただ transferable にすべきとの主張には賛同します。
- ・オープンアクセスの効果がどういうものであるか、という解として「自身の研究を transferable にする」というのであれば、多様な分野に被引用されたか、が新たな指標になりうるのか、と思った。一方で、最大の違和感であるなぜ研究評価が必要？という問題について、日本では資金提供者（納税者）への説明責任としてわかりやすい提示の手法が「数値で見せることができる」ことなのだろうと思う。
- ・研究力分析の最新の状況を知ることができた。日本特有の文献や論文の評価（リスペクト）など、各分野の評価基準が他分野にも分かりやすくしめされるようになるともっと研究が活発になるのではないかと、改めて感じた。
- ・小泉先生の挙げてくださる例が的確で、目から鱗が何枚も落ちました。
- ・小泉先生のお話しが上手でとても興味深く、研究者としての実感が伝わりました。
- ・論文の評価、特に質に関することの現状がよく理解できた。
- ・OA の意義を研究者に説明する際、即物的に研究インパクトの向上と結びつけてお話することがありますが、「レンガを自分の中に囲わずに、みなで共有することでこそ、いい家が建つのだ」ということを言えるとよいですね。説得力をもってそういうことが言えるようになりたいと思いました。
- ・評価ということで、即時 OA 基本方針に記載されている今後の評価の話なのかな、と思っていましたが、もっと広いお話で少し戸惑いました。ですが様々な視点から研究評価について考えることが出来ましたので、色々と参考になりました。
- ・被引用数、インパクトファクターなどの語句の正しい意味を知ることができ、とても勉強になりました。
- ・国大協の声明を国としてどう捉えるのか。今真剣に考えないと日本は立ち直れないと思う。

・ IF 以外の研究評価指標や、海外の評価事例等について知ることができて大変参考になりました。

・ 研究者としての感覚を含めたご意見、たいへん参考になりました。

・ Slido にあった「今日のお話ではいろんな場合が混在していたため、整理して理解する必要があると感じました。」という意見にも同意でき、整理する時間を設けてもいいのかもしれないと思います。

・ 図書館職員がなかなか知ることができない研究者のコミュニティ内の実態のお話が聞けて、大変有意義なセミナーでした。

・ 小泉さんの講義はすごくわかりやすくよかったです。

・ 研究者の率直な気持ちが聞けて面白かった。人文・社会系の論文でも海外の人に読まれることを意識すべき、というような話があったと思うが、メタデータぐらいは英語でも登録しておいた方がよいのだろう。

・ 今回のセミナー、大変勉強になりました。特に最後のスライド（小泉先生の論文 2 本の比較）のお話はとても印象的で、研究者を支える側の大学図書館員としても仕事のモチベーションが上がるものでした。研究者の方々にはぜひ curiosity-driven で研究を進めていただきたいです。

・ 今回ご紹介されていた Research Excellence Framework (REF) 2029 に含まれる、「Open Access Policy」は本年中に作成されるとウェブサイトに掲載されていました。その点についてまた後日に、ご解説をいただくと幸いです。

・ 研究評価にまつわるさまざまな事柄の復習にもなり、研究の「質」を測ることの難しさを改めて感じました。「厚み」の話をとっても興味深く伺いました。

・ IF や NatureIndex を研究評価に実際に使っている例をお聞きして、IF も使い方によっては研究評価の指標の一つとして使っても良いのではないかと思ってしまうました。

【開催方法について】

・ 講師の熱量がすばらしかったです。講師の本音もうかがえるところがこのセミナーの魅力です。また、進行も大変スムーズでストレスなく参加できました。

・ Q&A を長時間取っていただいたのは良かった。

・ 大変有意義でした。オンライン開催は特に、遠方の人間にとってはありがたいです。

・ アーカイブ配信はあるでしょうか？研究データの利活用、IR 分析の従事が浅く、追い付いていなかった部分もあり、反復視聴ができると嬉しいです。

【アフターセッションについて】

・ 普段お話しする機会のない、いろいろなお立場の方と、気楽に情報交換ができて、とてもよかったです。

・初めての試みとのことですが、いろいろな立場、所属の方ともフランクにお話しでき、大変よい機会になったと感じます。ぜひ、続けていただきたいです。